校長室だより～燦燦～ №７６５

ヒースロー空港

2023.6.6

初めての海外旅行は、イギリスとフランスとスイスだった。添乗員付きのツアーだった。最初に降り立ったのは、ヒースロー空港だった。イギリスの首都ロンドンの西部にあるイギリス最大の空港である。

到着した現地は、すでに夕闇に包まれていた。宿泊するホテルに着いた。ここからは、翌日の集合時間まで自由時間である。機内食を何度もいただいていたため、さほどお腹が減っていたわけではないが、ドキドキ、ワクワクしながら、とりあえずロンドンの街に出た。しばらくすると、ファーストフードのお店があった。緊張しながら、片言の英語で、定番のフィッシュ＆チップスを注文した。その大きさに、食べる前からげんなりした。先制パンチを食らわされた。

海外旅行といっても、添乗員さんが案内してくれるし、いつもそばには日本人がいる。海外の醍醐味を感じることができるのは、フリータイムのときぐらいである。ツアーはいいようでよくないことを学んだ。一番気を使ったのは、集合時間である。遅れれば、同じツアー客の皆さんに迷惑をかけてしまう。おかげで、最初のツアー旅行が、最後のツアー旅行となっている。

飛行機から見えたロンドンの灯り、そしてヒースロー空港は、今でも何となく覚えている。正確には、眼下の光景に心を動かされた自分のことを忘れないでいる。なぜ、だいぶ昔のことを、いつまでも忘れないでいるのか。これには理由がある。

今までに、二度単身赴任を経験している。一度めは南会津、二度めは奥会津だった。いずれも、福島に帰ってくるときには、高速を使わずに、土湯を越していた。峠のトンネルを抜けると、福島盆地を目指して下り始める。しばらく進むと、左手眼前に福島盆地の灯りが目に飛び込んでくる。毎週、同じ光景を目にしているのだが、その度ごとに心を動かされた。「今週も、無事に帰ってくることができた」という思いとともに、気持ちが週末モードに切り替わる。

この福島盆地の灯りと、眼下に見たヒースロー空港の灯りが似ているのである。こう思っているのは、私だけだろうと思う。それでいい。計５年の間、毎週のように、思い出のヒースロー空港の灯りを思い描いてきたわけである。

今でも、夜になってから土湯を越すことがある。すると、ヒースロー空港が現れる。初めての海外、南会津での教頭生活、奥会津での校長生活、様々な思いがこみ上げてくる。懐かしいとは一味違った心もちである。

いつの日か、再び夜のヒースロー空港に降り立ってみたい。飛行機は、あのときと同じヴァージン・アトランティック航空がよい。フィッシュ＆チップスはやめておこうと思う。